

災害を語り伝えるメディア表現： 〈他者〉表象から〈自己〉語りへ

Media Expression for Telling the Story of Disaster: From “Other” Representation to “Self” Narrative

○坂田邦子¹，○土屋祐子²
Kuniko SAKATA and Yuko TSUCHIYA

¹東北大学大学院情報科学研究科 Tohoku University

²広島経済大学経済学部メディアビジネス学科 Hiroshima University of Economics

Abstract This paper attempts to discuss possibilities and problems of digital storytelling as one of media expressions in relation to memories of disasters. This is based upon the actual practice of Onagawa Interview Tour by some university students from different areas who are not familiar with the Great East Japan Disaster. In Onagawa, they encounter the reality of the disaster stricken area and directly talk to victims. After that, they try to tell their own stories by the method of digital storytelling. Through their activities, it is found that there is a great possibility of self-storytelling not by victims themselves but by a mediator who retelling victims' stories and memories.

キーワード メディア表現，メディアリテラシー，東日本大震災，デジタルストーリーテリング

1. はじめに

「災害大国」と呼ばれる日本。ここ数年を振り返るだけでも、日本国内の様々な地域で、地震や津波、土砂災害、火山災害など多くの自然災害が発生している。災害の発生時には、マスメディアの報道やソーシャルメディアにおける情報発信が高まり、衝撃的な風景や被災者の悲惨な状況が次々に伝えられる。しかしながら一方で、時間とともに報道や情報発信は減少し、風化とともに、次の出来事へと人々の関心は移り変わっていく。

多くの場合、災害はその地域に記憶として留まるが、次に別の地域で発生するかもしれない災害の教訓や備えとして、他の地域に暮らす人々に伝えられる必要もある。そしてそれは、マスメディアが伝えるような画一的で均質的な記録ではなく、かといって流れるように発信と受容を続けるソーシャルメディアの散漫で断片的な情報でもない、共感を持って受け容れられ、語り伝えられる記憶であるべきだ。

本研究では、地域における災害の記憶を「語り伝える」ことの可能性について、2016年2月に宮城県女川町で行われた大学生による女川取材ツアーという実践事例を取り上げながら考えていきたいと思う。

2. 背景と問題意識

(1) 東日本大震災とマスメディア

2011年3月11日に発生した東日本大震災。津波、その後の原発事故を引き起こした複合災害であった東日本大震災は、ソーシャルメディアの社会的機能をあらためて世間に認めさせた一方で、マスメディアの報道のあり方においては大きな課題を残した。

被災地で被災者たちは、とりわけテレビの報道対象

地域における偏りに対する批判とともに、被災者自らが「物語化」されてしまうことに対する憤りと疎外感を感じていた。

東京のキー局を中心に発信される報道の多くは、被災地の人々が必要としている情報ではなく、被災者や被災地という表象だけが、画面に繰り返し映し出され、被災地の人々は大きな違和感を感じた。

これに対して、被災地域の広大さと、危険地域における規制の問題、企業としてのテレビ局の体力の限界など、送り手側にも多くの要因があったことが明らかになっている。（坂田ほか，2012）しかしながら、それらを差し引いて考えたとしても、被災地、被災者のメディアに対する印象は悪化し、結果として被災者たちはメディアに対して口をつむぎ、東北におけるポスト3.11の実相が伝えられることは一層困難になっていた。（坂田，三村，2016）

同時に、被災地外の人々にとっては、被災地の現況を知る機会は確実に減少し、震災そのものが過去の出来事となり、記憶の隅に封じ込められるのである。

(2) 他者のまなざしと表象の問題

このような結果を招いた原因は、上述したとおり様々な要因がある。しかしながら、そもそもテレビ局だけではなく、私たちも、「東北」という場所を無意識に他者化してしまっていないだろうか。「みちのく（道の奥）」という言葉を使う時、「東北の人たちは我慢強い」と讃える時、どこかに自分ではない他の人という感覚を持っていなかっただろうか。

メディアは「東北」を他者化したのが、それを容認する私たちを含めたそのまなざしに対して東北の被災者たちは、違和感を感じたのではないだろうか。

このことは、かつてサイドが論じたオリエンタリズム批判と同じ構図をもって説明される（サイド、1978:1993）。西洋がオリエン（東洋）をその対照として表象することに対するサイドの問題意識は、東京中心の日本のマスメディアのローカルな場所へのまなざし、そして「東北」に対するまなざしと表象の問題へとつながる。「東北」は「東京」からのまなざしによって、他者化されてしまったのではないだろうか。

(3) 地域間交流学習「ローカルの不思議」から「Bridge! Media 311」へ

これと同様の問題意識に基づき、多様な地域の大学の研究者が中心となり2003年に立ち上げられた「ローカルの不思議」という地域間交流学習のプロジェクトがある。東京中心のマスメディアが創り出すローカルイメージに対してオルタナティブな自己イメージを発見し、地域間で共有するためのメディアとネットワークをデザインすることを目的としており、大学生や高校生が地域に関する映像クイズを制作することで、メディアリテラシーについて学ぶ教育的側面もある。

（崔ほか、2005年、坂田ほか、2011年）

2011年の東日本大震災後は、このネットワークを活用して、東日本大震災とメディアについて考え、自らメディアを制作して自分の地域に被災地の様子を伝える「Bridge! Media 311」というプロジェクトを派生的に行っている。この「Bridge! Media 311」では、「ローカルの不思議」で行う交流学習の代わりに東北の被災地を実際に訪れ、メディアによってつくられた被災地のイメージと現場のリアリティを比べたり、実際に被災地に暮らす人々から話を聞いたりしながら、その時々被災地の実相を自分の暮らす地域に持ち帰って自分の言葉で伝えるということを行っている。

（Tsuchiya & Kitamura, 2015）

実践の主体となる学生たちは、自らの語りと表現を通じて地域間をつなぐ（メディア）となると同時に、メディアの虚構と現実についてのメディアリテラシーについて学ぶのである。

本研究では、このような実践のなかから直近の2016年2月に行われた実践プロジェクトを取り上げ、その目的や意義について報告したい¹。

3. プロジェクトの目的

(1) 自ら聞き伝えるメディアリテラシー

まず、プロジェクトの主体となる学生たちに対する教育的な目的について説明しておきたい。

上記で述べたようなメディア状況のなかで、被災地外に住む者が、被災地・被災者の実情を知り、理解することには困難がつきまとう。被災当事者でない者は被災者と同様の経験をしておらず、さらに彼らが被災者を知る手段であるマスメディアなどの他者表象は、

被災者を〈被災者〉という記号として扱ってしまう傾向があり、実際の当事者の思いや声とはずれが生じるためである。非被災者はメディアによる他者表象によるイメージは得られても、被災地・被災者のリアリティについてはそれを知らない現状がある。どうしても震災の問題は「他人事」になってしまうのである。

そうした中で、われわれがデザインしたワークショップでは、被災地外に住む大学生たちが被災地を訪れ、被災者にインタビューし、参加者同士が共に自分たちの経験をふり取りながら、デジタルストーリーテリングという自己語りの動画作成を行う。非被災者が被災地を訪れ、実際に町を歩き、人びとの話を聞くことは、単に被災者への理解を深めるに留まらず、被災者の理解の仕方への意識を変容することになる。彼らは被災地・被災者の実情に触れ、それまでの彼らの理解がイメージにすぎなかったことを知りえるのである。その変容は、それ以前に認識していなかったメディアに媒介された〈事実〉〈被災者〉への気づきへとつながるだろう。

また、本プロジェクトでは、参加者がそれぞれの地元に戻り、被災地のリアルな現状を伝えていくことを想定している。ここで問題なのは、当時者ではない彼らが被災者のことを伝える上で、他者の出来事として語ってしまったのは、従来のマスメディアやソーシャルメディアが陥りがちな、ぶしつけに外部からのまなざしを突きつける他者表象になりかねないという点である。本ワークショップでは、デジタルストーリーテリングという試みを通じて、他者ではなく自己の問題として被災地を語ることを試みる。具体的には、インタビューをそのまま他者の語りとしてまとめるのではなく、自らの聞いた経験と捉え直し、その経験に対する自らの思いや考えを短い動画にまとめる。こうした他者の語りから、自己の語りを生み出すプログラムを通して、被災地外からの参加者が主体として語ることを経験する。このように自らが地域間をつなぐ（メディア）となることで、メディアの可能性と不可能性について体験的に考えるメディア学習としての目的もある。

(2) メディアによる代弁／他者表象の限界に対する自己語りの可能性

もう1つ、研究プロジェクトとしての学術的側面における目的についても言及しておきたい。上述したとおり、とりわけ震災直後は、マスメディアにおける他者表象に関して被災地内の違和感は大きかった。しかしながら、ソーシャルメディアがそのオルタナティブとして文字通り代替するメディアの役割を果たしたかというところではなかった。実際には、ソーシャルメディアの書き込みは、被災地内にいる人々よりも、遠巻きに被災地を見守る人たちのためのコミュニケーション手段であった。いずれの場合も被災者は他者化され、代弁された。

代弁と（他者）表象の問題がとりわけ問題にされるのはサバルタン研究においてである。スピヴァクによると、サバルタン（社会的弱者）は語るができない。そもそも語る術を持たないサバルタンの語りは、

¹ 本実践では、全体統括を坂田邦子が行い、土屋祐子が提案したリレー型デジタルストーリーテリングなどを基に、北村順生・小川明子・松浦さと子ら参加教員やスタッフで相談してワークショップのプログラムを考案・実施した。

知識人による代弁／表象によって可視化される。しかしながら一方で、この代弁／表象自体が透明化されており、その背後にあるイデオロギーや権力の問題が追及されていないのだ。(スピヴァク, 1988:1998)

このことは、上述したマスメディア批判と実は同じ構図となっている。被災地・被災者を代弁・表象する中間者であるメディアの権力あるい権力的なまなざしによって、被災地・被災者は語るができずにいたと言えるだろう。

では、この代弁／表象というプロセスを経ないで被災者が語ることは可能なのであろうか。被災者＝サバルタンではないので、ここでその結論を出すのは拙速に過ぎるだろう。したがって本研究では、当事者による語りそのものを追究するのではなく、また非当事者による他者表象でもない語りの可能性について考察することを目指す。つまり、当事者から話しを聞き、現場の様子を見、それらを自らの体験と位置づけて語り直し、伝えることの可能性、つまり媒介者／中間者による自己語りの可能性について検討することをもう一つの目的としたい。言い換えると、デジタルストーリーテリングによる自己語りの実践が、災害を語り伝えるために、これまでのメディアの語りに対するオルタナティブな語りとなり得るのか、という点について考察することを本研究の2つ目の目的とする。

4. プロジェクトの内容：女川取材ツアー

(1) 概要

以上のような背景と目的に基づき、女川取材ツアーは、2016年2月13～15日の2泊3日で行われた²。

ツアーには、名古屋大学の学生6名、新潟大学の学生8名、広島経済大学の学生6名、龍谷大学の学生3名と各大学の教員、そして東北大学の教員と院生を含むスタッフが参加した。

プロジェクトでは、大学生が東日本大震災の被災地である女川町を訪れ、被災した人々や復興に携わる人たちに直接取材することを通じて震災と復興について学ぶこと、そして取材した内容を地域に持ち帰り、メディアで実際に発信することを通じて、震災を伝えることの難しさを学んだ。

1日目は、女川町と震災についての講演を聴いたうえで、まち歩きを行い、2日目は、グループに分かれ取材先を訪問し、女川町の震災の影響と復興の様子について直接取材した。また取材した内容をもとに女川のこれからについて考える場を設け、デジタルストーリーテリングの制作を行った。3日目は、制作したデジタルストーリーテリング作品の発表会を行った。

これらの作品は、動画サイトYou Tubeにアップされ公開されるとともに、その後当日の報告とともに各地域のメディアで発表された³。

² 宮城県女川町は、2015年12月に、被災地の市町村なかではいち早く「町開き」を行い、中心地に公共施設や商店街が開設されていた。

³ UX新潟テレビ21「ナマ+トク」3月10日放送、広島市安佐南区79.0MHz FMハムスター「はむっしゅ! de Thursday」3月10

以下、各活動について具体的に説明する。

(2) 当事者の語りを聞く

1日目に行われた女川町と東日本大震災についての講演では、女川町役場産業振興課職員からは女川町の紹介、女川町観光協会職員からは東日本大震災の状況説明、そして女川さいがFMのスタッフからは、女川さいがFMについての紹介があった。まち歩きでは、復興した町中心部だけでなく、かさ上げされた浸水域の様子、津波で倒壊した建物などを見学した。また宿泊先のホテルでは、ホテルの女将による震災の生々しい体験談が語られた。この日、参加した学生たちは、被災地を訪れるまで抱いていたイメージとリアルな被災地のギャップを感じたのではないだろうか。

2日目午前中には、グループに分かれ下記の5つの団体に取材を行った。いずれも町の住民の声を直に聴きたいという要望に対して受け容れを承諾してくれた団体で、女川町のまちづくりを担う人たちである。

①果樹園CAFÉゆめハウス（一般社団法人コミュニティスペースすみねこ）

②女川向学館（認定NPO法人カタリバ）

③女川桜守りの会

④みなとまちセラミカ工房

⑤株式会社高政

取材後は、メディア・ワークショップとして、デジタルストーリーテリング制作を行うため、取材は、写真撮影（カメラ）と聞き取り（ICレコーダ）をメインに行われた。

取材は、ボランティアや手作業などの体験と組み合わせで行われ、取材内容については、各団体の下調べのうえ、事前にグループごとに相談して決めており、各グループで交代で聞き手となりながら、取材を進めた。

(3) 自らの言葉で語り伝える一リレー型デジタルストーリーテリング

2日目の午後には、デジタルストーリーテリング制作に入る前に、取材先から持ち帰った取材データを整理することを目的として、これまでの体験から得た気づきをグループワークでまとめ、言語化していくワークショップをまず実施した。このワークショップは、3つのパートに分かれており、「心に残ったこと」「女川のまちづくりについて」「私が住みたい女川」というテーマで段階的に行った。「心に残ったこと」では、写真を整理しながら心に残ったことを何でもよいので付箋に書き出して共有するという作業だった。

「女川町のまちづくりについて」は、「心に残ったこと」の付箋を参考にしながら、現在の女川町のまちづくりに関する要素を抽出し、「私が住みたい女川」では、それらを中心としてまちづくりの提案を行った。最後にこの発表を女川町の人たちにも聞いてもらい、コメントももらった。

日放送、京都コミュニティ放送（三条ラジオカフェ）3月31日放送など。

以上のワークショップにおける学生同士の、そして女川町の人との対話を前提として、この後、実際に個人々人によるデジタルストーリーテリングの制作に入っていくことになる。デジタルストーリーテリングは1990年代初期に米国カリフォルニアから始まった写真と自分のナレーションで構成する数分の動画を制作する自己語り実践で、世界中で取り組まれている。

(Hartley, , 土屋, 2013, 小川, 2015) 基本的なデジタルストーリーテリングは自分の内にある記憶や経験、思いを語る。本プログラムでは、他者の語りを聞くという行為を自己の経験として位置づけ、他者の語りから自己の語りを生み出すリレー型のデジタルストーリーテリングに取り組むものである。

本デジタルストーリーテリングのワークショップでは、「女川町から伝えたいこと」をテーマに、1人1分間の作品を制作した。参加者は震災当事者のインタビューを始め、2日間のフィールドワークの中で見た・聞いたことから、自分の一番心に残ったエピソードを取り上げ、それを起点にストーリーを生み出した。ストーリーの構成は、「(1) 活動の中で一番印象に残ったエピソード (2) 背景説明やそれを選んだ理由 (3) 自分の気づきや学び、地元伝えたいこと」という枠を設けた。本構成を通じ、参加者は震災当事者によって語られた語りを「私」の語りと接続する。学生は、当事者の語りにそれぞれ意味を見出し、自分なりに解釈する中で自分の語りを立ち上げていく。語り手に対する聞き手の共感に基づき、他者の語りは自己の語りとして語り伝えられるのである。

構成シートの作成、写真の選別、ナレーションの作成と、ここから作業は個人単位で行われる。この日は夜を徹して学生たちの作業が行われた。

最終日の3日目には、これらの作品を完成させ、発表会を行った。全部で23の作品が取材先によって分けられた5つのグループごとに発表される。

発表された作品に別の学生がコメントし、発表者がコメントバックを行うというやりとりが23回行われた。

以上がツアーの全行程であるが、もう一点、地元に戻ってからの学生たちの活動についても付け加えておきたい。

(4) 地域に伝える／当事者に伝える

参加者は地元に戻り、コミュニティFMやケーブルテレビなどそれぞれの地域メディアを通じて女川での経験を伝える取り組みを行う。広島経済大学では広島市安佐南区のFMハムスターの番組で、制作したデジタルストーリーテリング作品を流し、学生がそれぞれの経験や気づきを報告した。⁴

さらに、制作したデジタルストーリーテリングはウェブの動画共有サイトに投稿し、誰もが見るができるように公開した。参加した学生自身にとっても、作品は自分たちの経験や現地での思いをふり返ることを可能とするものとして、報告の場面でも繰り返し参

照された。

また、制作した作品は取材させていただいた方に送り、コメントをもらった。震災当事者にとっては、自分たちの語りが、聞き手にどのように伝わり、解釈されたかを理解する機会となった。取材先の一人からは、自らの想いが伝わったことに対するうれしさと自身の復興活動への改めての気づきについての連絡をいただいた。その他の取材先からも、学生たちの気持ちが伝わる作品になっている、素晴らしい試みであるなどのコメントをいただいた。女川の活動を活性化していくような、語りの循環が生まれ、他者として一方的に外部に伝える訪問者ではなく、復興の一助となる当事者としての語りの意義が見出された。

5. プロジェクトの成果と課題

(1) 学生の作品から

参加した23名の学生は、町を歩き、話を聞くフィールドワークの中から、伝えるべきエピソードを選び作品化した。学生の制作した作品は、第一に女川の復興に尽力する人びとへの共感や復興の現状への理解を述べるもので、具体的に取材した人の言葉や活動を丁寧に説明しながら語られるものが多かった。例えば、色鮮やかなスペインタイルを制作する「セラミカ工房」を訪問した『タイルの想い』という作品は、素焼きの茶色のタイルに模様を描いていく手法と津波で建物が流され茶色の地面に覆われた女川を立て直していく現状が重ねられて表現された。工房の主宰の方が話された「下書きをしっかりと行う」というタイル作りと町作りの共通点は、制作した学生にとっては意外であると共に強く納得するものであり、女川での活動の中から拾い上げた彼なりの発見だった。

第二にあげられるのは、自分たちのイメージしていた女川や復興の状況と実際のギャップへの驚きから生み出された作品である。子どもたちが放課後に学ぶ場を提供している「女川向学館」に行った学生たちは、仮設住宅に住んでいるためにいつも声を潜めていなければならなかったり、町が復興の工事中であるため、未だ遊ぶ場所がなく、歩いて学校に通うこともできなかったりする子どもたちの実状にショックを受けた。復興したとは言い難い現状を伝えたいと『子供たちの居場所』『歩いて通学できる道』などの作品が生まれ、子どもたちが心おきなく歓声を上げて遊べるような日常が戻ることへの願いが述べられた。

第三は、女川で聞いた言葉や起きている出来事から連想し、自分自身の事や地域のことを語る作品である。復興のために試行錯誤と創意工夫を重ねて尽力する人の言葉に鼓舞されて自分自身のこれからの生き方を見つめ直す『とりあえず・動いてみる!』。『被災地と未災地』『この目で見届けなきゃ。』は、広島の学生が作った作品で、2014年8月に起きた土砂災害の現状への懸念を伝え、復興のために自分自身が主体的に関わることの責任を語っている。動画を制作するプロセスにおいて、彼らの女川や被災地への理解は深まり、さらに被災地や災害に対する意識が大きく変容した。

⁴ 報告内容は番組ブログに掲載。FMハムスター「オープン・サウンド・コミュニティ」<http://os-community.seesaa.net/>

(2) 多声的な物語の生産

本ワークショップには 23 名の学生が参加する大規模なもので、一人ひとりの学生によって見出され、語られる女川はそれだけでも町の様々な側面を映し出していた。さらに、参加者たちは 5 つのグループに分かれ、異なる活動をしている方々に話を聞くという経験から作品づくりを行ったので、最後の上映会ではまさに多声的・多視的な女川が浮かび上がった。個々人の発見が、一緒に活動していたメンバーだけでなく、上映会に参加した他グループのメンバー、教員、スタッフら約 40 名に共有された。その場に居合わせた人はみな、単純化して語れない復興の現状を感じ取ることができたように思う。

一つひとつの物語は短く、断片的で女川のごく一部しか伝えられないものではあったが、こうした大勢で取り組むワークショップにより、多声的な物語が生産されることは、実際に語られた物語を越えて、未だ語られていない事らへの想像力と語りえる可能性を提示する場となっていたように思われる。

(3) 自己語りの可能性と課題

リレー型デジタルストーリーテリングは、他者の語りを自らのそれに変換していくものであると同時に、それに立ち会う人々とともに語られた語りの文脈を超えて新たな語りを伝えていくものであった。

マスメディア等のメディアの場合、メディアである媒介者が、当事者である被災者をリプレゼント (represent)、すなわち、代弁/表象することによって当事者の状況や体験を客観的に伝えようとするのに対し、このリレー型デジタルストーリーテリングの場合は、当事者を代弁/表象するのではなく、媒介者が自らの体験や見聞を自らの言葉で主観的に伝える形をとる。

このことは、アート作品と同様、枠組みに規制されないことで、自由な表現を可能にし、言葉を滑らかに伝わりやすくするかもしれないが、一方で、当事者の感情を蹂躪してしまうかもしれない恐れが多分にあることも意味している。もちろん、誤った解釈や真実ではないことを伝えてしまう可能性も十分にある。

また、他者表象ではなく、自らの言葉で自らの体験を語るため、これまで問題視されてきた媒介者/媒体の透明性に代わって、語り直しをする語り手のイデオロギーや立ち位置があらためて問われることになる。

これらの点において、自己語り作品として提示される際には、語り手と当事者との関係は、既存のメディアよりもさらに深い信頼に基づくものでなければならない。このことは、語るための必須条件となる。今回の実践では、取材に先立ち、取材の目的を取材先に明らかにしておくとともに、制作された作品の妥当性について確認したうえで、作品を公開したり、学生たちの暮らす各地域のメディアで報告を行ったりしている。そして、そのなかで、作品を制作したを行った学生たちの実名と所属も明らかにしている。これらの手続きを経ることで、語り手と語る内容に対して「語る

ことへの許可」⁵が与えられるのである。

このように、媒介者/中間者による自己語りとは、一方的な語りではなく、当事者との対話と信頼関係の構築を通じた「語ることへの許可」を得て成立する。そして、この自己語り聞き手へと受け容れられるのも、また媒介者/中間者が〈中間〉にいるがゆえであることを最後に述べておきたい。今回の実践で、語り手となる大学生たちは、各地域から被災地に入り、そこでの体験と当事者との対話を受けて、語りをつむぎ、さらにそれらを地元へ持ち帰った。多くの作品は、自分自身の地元での経験や想いと、被災地の経験や想いをつなぐものであった。彼らの語りは、これらの地域の〈中間〉という立ち位置に立つことによって、当事者と地元の人々との間を「自己」を媒体としてつなぐことの可能性を示すものであったと言えるだろう。

もちろん、この自己語りによって語り伝えられることは、やはり断片的であり主観的であるということも再度確認しておく必要もある。上述したように、それによって誤解や偏見を招く可能性もあるかもしれない。語りに対する責任を負う必要もある。それでもなお、今回の実践によって示された自己語りによる語りの多様性については、その可能性を否定することなく、オルタナティブな語りとメディアのための一つの表現方法として捉えることができるのではないだろうか。

6. おわりに

語り伝えることは、小さなコミュニティの中でさえ困難なことが多い。実際に、東日本大震災では、コミュニティ自体が崩壊してしまった地域も多く、地域の外にまで語り継がれることなく、多くの記憶が霧散してしまっていた状況であると言えるだろう。そんななか、「真実を客観的に」伝えなければならないという報道観念に縛られことなく、また当事者だけが「語る許可証」を持っているのだとして「語りの許可証」の出し惜しみをすることなく、来訪者や観光者などの語りの媒介者/中間者となり得る人々による自己語りという自己を媒体としたメディアの可能性について、さらなる実践を通して検討していく必要があるだろう。

参考文献

- 1) 小川明子 (2016) 『デジタル・ストーリーテリング—声なき想いに物語を』リベルタ出版
- 2) Said, Edward (1978): "Orientalism", Pantheon Book, 今沢紀子訳、『オリエンタリズム 上下巻』, 平凡社, 1993.
- 3) Said, Edward (1984) "Permission to narrate- Edward Said writes about the story of the Palestinians" *London Review of Books*, 16
- 4) 坂田邦子・小川明子・崔銀姫・土屋祐子・川上隆史 (2011) : 地域イメージにおけるステレオタイプの考察: 地域間交流学習「ローカルの不思議」の実践事例から『社

⁵ 「語ることへの許可 (Permission to narrate)」という言葉は、もともとは、1984年に、エドワード・サイードが、『London Review of Books』に寄稿した論文のタイトルであり、シオニスト的言説のなかで、パレスチナ人たちが自らの歴史を取り戻すために「語ることへの許可」を得なければならない状況にあることを訴えたものである。(Said, 1984)

- 会情報学研究』No.1, pp.51-64.田中一（1997）：情報と情報過程の層序, 『社会情報学研究』No.1, pp.3-16.
- 5) 坂田邦子・三村泰一編（2016）：『被災地から考える 3.11 とメディア』サンパウロ書店
 - 6) Spivak, G.C. (1988): “Can the Subaltern speak?” in Cary Nelson and Lawrence Grossberg eds., “Marxism and the Interpretation of Culture”, University of Illinois Press, 上村忠男訳, 『サブアルタンは語ることができるか』みすず書房, 1998.
 - 7) Hartley, J. & McWilliam, K. (eds.) (2009): “Story Circle: Digital Storytelling Around the World”, Wiley-Blackwell.
 - 8) 崔銀姫・北村順生・坂田邦子・茂木一司（2005）：地域理解のためのメディアリテラシー実践－異文化交流とオルタナティブなコミュニケーション回路構築『教育メディア研究』
 - 9) 土屋祐子（2013）：デジタルストーリーテリングのグローバル展開：転換的・共創的に広がる市民メディア実践『広島経済大学研究論集』第35巻第4号, pp.191~199.
 - 10) Tsuchiya, Y. & Kitamura, Y. (2015): Digital Storytelling with Tablets to Share Experiences of the Tohoku Earthquake, “HUE Journal of Humanities, Social and Natural Sciences”, Vol.38, No.2, pp.45~52.
 - 11) 東北大学大学院情報科学研究科メディア文化論研究室（2012）：『「3.11 からメディアを考える」プロジェクトテレビ局アンケート調査集計結果』レビ局アンケート調査集計結果』

謝辞

本研究は「嵐」基金および JSPS 科研費 15K00475 の助成を受けたものです。